

岡村駿（おかむらたかし）ヒアリング第三回
2022年7月1日金曜日午後1時30分より
なか区民活動センター
NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会
（檜楨貢・田口俊夫・浅川賢司・青木淳弘）

田口 じゃあ始めます。よろしくお願いします。

岡村 その当時はね、都市科学研究室的なものは、東京でも都政調査会と東京市政調査会、まだこんな研究団体しかなかった。だから、行き来はたくさんあったんだ。あったっていうか、行き来をして、次の特集をお宅は何にするんだとか、ここの部分、悪いけど、そちらで書いてくれないとか、そういう。だから、仲間内の関連っていうのはたくさんあるし。そこはみんな。この間、全体を引っ張ってきた連中なんですね。それがこの（横浜市史資料室「紀要」第8号2018年刊）、ここの中村紀一さんのところにしっかり書いてあるんですよ。以前、十数年前にこの対談っていうのかな、レクチャーは彼、皆さん、知ってる羽田さんっていうかな。羽田博昭さんと、それからもう一人は百瀬敏夫さん。お二人が2002年にレクチャーを受けて、「中村紀一氏が語る高度経済成長期の公害問題と住民運動」というのでまとめて。その後、もう一遍、またやってるんですよ。それがここに書いてあります。例えば、彼が横浜に行かれたのが昭和27、28年頃、たまたま住んでたっていうことがあるのと、それから、自分がやっていた国道16号線の反対運動みたいなものを書きたいなっていう、横浜市に調査室。これはだから、横浜市総務局行政部調査室です。だから、鳴海さんの部屋のことなわけね。鳴海さんもまだ1期目、入ったときにはどうやって動いていいかわからないから、彼も部屋だけ構えて、そこであちこち。まず横浜の学者さんだってなじみないわけですよ。横浜には四大学、一応あるんだけど。その人たちに紹介を。大体、その辺の紹介は、こないだ亡くなった今井清一さん。今井清一さんが間に立って。中村さん自身は修士論文「横浜の公害行政」を書くので、鳴海正泰さんを通じて職員の方にインタビューしたっていうこと。だから、鳴海さんが職員を紹介してあげてるわけね。その中で助川信彦さん（公害センター所長、初代公害対策局長）と会います。鳴海さんは、君が書いた論文の事例の部分を『調査季報』に載せるよということで、『調査季報』を通じて親しくなったということなのかというと、『調査季報』というだけじゃないけども、いろんな人を介して鳴海さんに近づいたと。それくらい遠かったってことかな、外からその部屋にアプローチするには。ということは、逆に言えば鳴海さんもどこに手、出していいかわからなかったという状況。中村さんの指導教官が蛭山政道先生。直接、指導してくださった1人が渡辺保男さん。それから、渡辺さんに相談したら、東京市政調査会の高木鉦作さんを教えてくれたと。そこに出かけて、高木さんの紹介で鳴海さんの所へ行ったと。それから鳴海さんの紹介で助川。そのときは公害センターの所長。初代公害対策局長なんですけどね。そこで初めて会っ

たと。それが44年なんだな。そうしたら、助川さんが、200ぐらいしか出さない貴重な資料というのを惜しみなく僕にもくれた。

そこで何が始まったかという、中村さんは学生だったけども、もう一人、飛び込んできた人がいて。それは仲井富と、正式にはいうんだけど通称トミさん。社会党の青年部にいて、そのとき、社会党が選挙で大敗して、多くの秘書が失職したわけね。その中で職員の首を切るには自分が辞めるということを前提にしないと手がかけられないからということで。それで、自分は自分で自活しなきゃいけないからということで、前に公害白書みたいなものを全国で作ったんで、それを基になんか始めたいとって、飛鳥田さんの所へ来た。飛鳥田が助川さん呼んで紹介してくれた。それから、東京でいろいろな人たちが賛同してくれて。

中村さんたちの流れも力があり、その後、ずうっと一緒にやってるから。この時期ってのは、昭和45年。ここですよ。インタビューでは全く触れられなかった横浜市関連の二つの活動。運動って書いてありますね。運動に関わるようになったと。第一は公害問題研究会での活動で。そこが研究会って形でまとめたわけですね。東京、それから横浜、その他全国、いろいろな地域の運動体に声を掛けた。そのときにね、集まって、なんかしなきゃしょうがないなということで、公害研は1969年4月、京浜急行、日ノ出町駅近くのガード下にある『キヌヤ』で呱呱の声を上げ、初代会長が飛鳥田市長。それで私の所にも、なんか出てきたら協力しろよ。要するに、鳴海さんは鳴海さんで仕事、持ってるわけね。今度、その他、新しく出てきたりした場合、その内のいくつかはこっちに回ってくるようになった。ですから、初代会長は飛鳥田一雄、そして参謀役を務めたのが助川信彦。それで、それが2代目の会長として2010年10月に亡くなるまで屋台骨を支え続けたと。それに岡村駿、それから松本得三など、市の心ある職員が積極的に活動に参加したと。これを全国組織にして公害研は70年の5月に会員の研究誌というような形にした。『環境破壊』という機関誌を発刊したんですね。名前がちょうど時代に合ったのかもしれないけども、これを各地域労組のほうに落としていって。その活動は渡辺文学さんが営業担当として頑張った。

檜 槇 禁煙運動を始めた人ですね。

岡村 そう。

檜 槇 今の社会では渡辺文学を忘れられていますね。

岡村 渡辺文学と仲井富さんと、それからもう一人は『環境破壊』編集担当の女性。3人で始めたわけですね。それで私にも一度、会いたって。新宿に毎日新聞記者だった渡辺文学さんのお父さんが事務所を持っていた。

岡村 その事務所に間借りするような形で。そこへ来てくれ。会わせたい人が居るとのこ

とだった。それが助川さんだったけれど、僕と彼は知ってるわけ。知ってるけど富さんたちは知らないわけよね。だから、こちら横浜市の公害対策やってる助川さん。こちら、都市科学研究所の岡村さんです。お二人にはこれからずっと面倒見てもらうんだけど、きょう、初めてっていうような、そういうところで。それが87年ですから、175号をもって終刊するまでずっと続けてました。17年間、とにかく続けて多くの人が集まり、知り合いました。

中村紀一さんはこれへの活動を通じて宮崎省吾さんだとか、それから北電誘致に疑問を持つ会の正木洋だとか、それから豊前火力を阻止の松下竜一だとか、それから芦川照江だとか、それから北山郁子さん、渥美の公害勉強の会だとかですね。いわゆる住民運動の実践家に出会って。彼らとのいろんな話の中から「住民運動私論」が生まれて。これが一つだった。この交流や流れは今でもずっと残ってるけど、みんな、今、鬼籍に入りつつあるということですね。ですから、そういうこと。それから、その関係で三里塚だ何だというような話が出てきちゃうわけだけど。私たちにとってはフラットな付き合いの場所だったと。

それからもう一つ。第2話が、1978年1月から81年3月までの3年間。「横浜開港資料館設立研究委員会」の活動に携わったことであると。77年12月11日から12日にかけて、公害研の年末会議。だから、公害研の忘年会ですか。それが伊東で開かれたと。大体、いつもかなりの人が集まるんですけど。そこで会議が終わって、風呂へ入っているときに岡村さんが入ってきて、「中村さんも住民運動みたいに真面目なことばかりやってないで、ちょっと道楽もしない」かと。詳しく聞いてみると、横浜に開港資料館設立の計画があり、資料館の運営、資料の管理、公開の在り方について助言できる専門家を今、探してるんだと。なかなかその当時、まだいなかったんですよ、情報公開だ「知る権利」というのをやる人が。中村さんはたまたま広報関係を「市政調査会」当時の頃から。広報との関係でどこまで情報提供をするかというようなことで、一応、その辺のところを専門にしていたもので。そんな調子で「やってみない？」って言ったので、「面白そうだったんで引き受ける」ことにした。

いざ第1回の会合に出て驚嘆したと。専門委員には石井孝。石井孝は幕末開港を国際関係論の中で歴史的には東京をはじめ、最新の先生。山口和雄さん。それから遠山茂樹さん。それから今井清一さん。それから日本近代史の研究者として尊敬してやまない諸先生が。また近代建築史の第一人者、村松貞次郎先生が名を連ねていたと。会議は17回、開かれ、毎回、面白いどころか緊張のしっぱなしだったが、先生がたの話し合いを耳にするのは楽しかった。特に新潟市郷土資料館、福島県歴史資料館、茨城県立歴史館への視察の折の雑談など、至福の時を過ごしてる感じがしたと。会議が終わると今井先生と岡村さんと私はよく中華街や伊勢佐木町に繰り出したと。

会議も後半。必ずこれは出てくるんですけども、開港資料館の民営化、つまり財団化してくれないかという話が出てきたんだけど、そのときに遠山、今井、両先生に加わって反対の共同戦線を張ったのも懐かしい思い出。当たり前だと。公文書を扱う、だから、総務局のきちとした人、市職員としていなければ資料館なんかできないじゃないかというような

ことで反対の共同戦線を張ったのも今は懐かしい思い出であるというようなことで、彼がやってみて。その後、羽田さんは新貨物線の資料を自分の所へ入れたりしたんで、それで、いわゆる革新自治体の限界を既にやっぱり宮崎省吾さんが見抜いていたと。そして松下圭一さんをはじめとした学者たちは住民運動の実践の展開によう付いていけなかったと。

飛鳥田市政のブレーンであった横山桂次も自分で理論化するより先に次々と新しい問題提起をされ、それに付いていくのが精いっぱいであったと述べているほどであると。一緒に、だから、領事館のほうへ調べに行きました。行っても間に合わないわけだな。先生、こういう問題、今、開発がここまで来てるけども、これはどういうことなのって言われても、なかなか。要するに、運動とかそういったもののテンポの方が速過ぎたという。そして1970年前後の住民運動を語る際に、宮崎の「地域エゴイズム論」とともに「住民運動私論」と中村氏の議論が必ず引き合いに出されるゆえんであるというふうに羽田さん、書いてますけど。だから、これは羽田さんに聞けばわかるし、この本に全部、今、言ったようなことは既に書いてありますので。だから、ちょうどここは資料館と、それから都市科学研究室をやるということになってたんで。そういうのがごっちゃになってますよと。そういう中でいろいろな基本構想だとか、そういう計画を進めてきたということ。

あとはやっぱり資料館のことと、それからなぜ大佛記念館と、開港資料館と、県の文学館と、霧笛橋。それが皆、100メートルぐらいの距離にあるんですもんね。そこについていうのは、こないだ浦辺の、横浜での展示会があったんですよ。行かれました？

田口 行きました。

岡村 あそこへ出てると思いますけども。横浜では担当が曾我部さん。神奈川大学の曾我部先生が担当になったんです。そのときに発行されたパンフレットに曾我部さんが出て、今回の展覧会に際して霧笛橋を含めれば四つの浦辺建築が数百メートルの範囲にあることを驚きとともに再認識したと。特にその立地と竣工年から田村明との関わりが気になったと。都市デザインの横浜の黎明期に浦辺や、その建築がどのような関係を持っていたのに関心が向かったのであると。高橋志保彦の後任である筆者の研究室には、横浜の都市デザインや田村明に関する資料が多くある。それらを読み直してるうちに本当の背景を知りたいと思うようになって、横浜市創造都市事業本部の活動の推進役だった仲原正治さんに連絡すると、1週間ほどしてレポートとともに返信があったと。田村の著作とともに田村と協働した、堀勇良(元横浜開港資料館)なんだよな。岡村駿のヒアリングもまとまった労作である。以下に紹介するエピソードの多くはこのレポートが基になっている。

横浜の浦辺建築は竣工順に言うと大佛次郎記念館が78年、開港資料館が81年、近代文学館が84年、霧笛橋が86年。この四つ、どんどんできちゃうわけね。初めに田村が浦辺に依頼したのは、後に横浜開港資料館として実現する、元イギリス領事館の改修プロジェクトで。最初は大佛次郎記念館とするための増改築計画だったわけですね。その後、田村が率

いる横浜市企画調整局による戦略的な調整が行われ。これは土地調整ですよ、要するに。フランス領事館跡地である港の見える丘公園に大佛次郎記念館を新築することになると。それから元イギリス領事館は開港資料館としての増改築が決まり、いずれも浦辺に設計を依頼したと。この経緯は田村の著作でもしばしば紹介される興味深いものだが、ここでは割愛する。神奈川近代文学館は県が経緯に配慮して。これも長洲でしたからね、このときにね。同じく浦辺に依頼をした。土地は市から県へ譲渡。これが西さんの土地が関係してくる。

田村は 1981 年に市を退職するが、飛鳥田一雄市長時代である 78 年までに企画調整局長として活躍した期間であると。78 年までにこの開港資料館の基本構想をつくって、そして方針決済を取り、私が社会党本部の委員長室へ、行って飛鳥田のはんこを押して貰ったんだよね。それを押してないと。ていうか、そうした形の基本方針が固まってないと、いつでも取り消されちゃうから、役所は。それはっていうことで、俺が行って取ってくるからといって社会党本部の委員長室で決済を取りました。

田口 ちょっと質問ですけど、その市長方針の決裁書があったとしても、だからといってそのまま行くということは限らない？

岡村 そう。その後、改めて積極的な後押しがなきゃいけないわけですよ、それを頼りに。

田口 つまり考えると、前市長はそういう方針決済書をやったけれど、新市長は、いや、それはなしだって。本当は理屈上できるんでしょう？

岡村 理屈上どころじゃなくて本当にできる。

田口 できるのですね。

岡村 それ、後で話しします。田村さんは焦ってたわけだな、飛鳥田さんが 78 年にいなくなるっていうから。だから、その最初の基本構想は田村さんも委員だったんですよ。だけど、7 月に外されたからね。外されると次の、寺内さんとかいう人が企画調整局長になった。はんこ押してますよ。分かるわけないんだからね。

飛鳥田一雄が、78 年 3 月 1 日に市長辞任。そこまでが企画調整局長として活躍した時期であると。その後、田村さんは技監兼都市科学研究室長。併せて技監設置規則の改正により、権限も大幅に縮小される。この年に横浜開港資料館設立に関する中間報告というのをまとめたわけだ。中間報告をまとめただけじゃやばいんで、その基本的な方向というのを重ねた、私がこれ、作ったわけです。調査季報に載せるといのは横浜市の内部だけの話だけじゃなくて、外に出ちゃうっていうこと。それからもう一つは、どこの係もこれで、後戻りするなんていうところまでは。今度、後戻りさせる論理を考えなきゃいけないわけだ。それ、

できないわけ、ここまで来ちゃうとね。今、また話しますけどね。

これをまとめて、事実を既成事実化して、そして二つの浦辺建築の実現に向けての道筋をつくったと。横浜市での田村の最後の仕事は浦辺とともにあったと言っていいと書いてるね、これ。そして、誰が浦辺を勧めたのかというので。それは赤レンガ倉庫を担当するためにふさわしい建築家について、田村が村松に相談したことが浦辺につながるきっかけだった可能性が高いんじゃないかと。それはなぜかといえば、新港ふ頭のれんがの上空調査を村松貞次郎に委託したんですよね。だから、そもそも田村はなぜ浦辺に仕事を依頼したのか。仲原のレポートによると、田村は歴史的建造物の活用として赤レンガ倉庫に最大の関心を持ってる。それは私たちにも何度も言っていました。要するに、あそこを美術館にするんだと。大佛があって。大佛のドレフュス事件と、それから『パリ燃ゆ』と。その資料はどうしても横浜で持ちたいっていうのが。

それから田村さんは開港資料館を造って、そしてその間に浦辺という建築家を横浜になじみを持たせて、あの赤レンガ倉庫で美術館。そうでなくて文化室うんぬんというときに美術館構想だけになっちゃったでしょう、やったことが。文化はやらせなかったでしょう。文化は、企画調整局が役所全体をコントロールしながらやるんだもんね。それが文化でしょう。要するに、横浜の行政自体が文化的になってかなきゃいけないのに、文化室なんていうのがあって、そんなところに号令掛けられてたまりますかっていうのあった。だからやる。だけど、長洲は一緒にやってほしかったわけ。私の所にも来ましたよ。来たけど、これは悪いけども文化は違うっていうことにして。だけど、付き合わないわけにいかないから、名前は文化室として美術館担当と。そうすりゃ役所の次の人は美術館の指名権、持ってるわけだし。だから、田村は下手なやつにいじられるよりは、まだ赤レンガ倉庫を置いといたほうがいいという。

田口 すみません、今、言われたことがよく分かんないですけど。文化室。長洲さん？

岡村 文化室ってできたんだよね、あの当時。1975年当時にね。

田口 たくさんありましたよね。

岡村 それはね。きょうもそう来るだろうと思った。いろいろとね。普通は教育委員会が、文化担当。だけど、教育委員会の枠から離脱して、最初に市長部局に文化担当部門つくったのは1958年の京都市文化観光局なんです。それ、なぜかっといったら、教育委員会になんかなったら、京都は観光で売らなきゃいけないのに市長部局でもって。要するに、俺のこの主要産業だといって、58年に文化観光局。それが最初ですよ。それから慌てて、といっても66年に京都府、73年に大阪、それから75年に兵庫と関西の府県から。要するに、文化何々っていうのは、それは経済にも負けちゃったから文化でいこうっていう関西のね。

檜 革新自治体で。確かにありましたよね。

岡村 そうですね。関西の府県から始まって、関東では『ださいたま』と言われた埼玉が76年に博報堂になったもので、県そのものをイメージアップしたんだ。それ、だから、普通の使い方だな。77年に、神奈川県が。神奈川県には森啓さんという人がいて。

檜 いましたね。

岡村 ……なかなか元気なおじさんで、お役所仕事を批判する壁新聞なんか作っちゃって、議会ともめるようになってしまったわけだ。ただ、まだその当時、何が文化行政かってのはよく固まっていなかった。だから、例えば神奈川なんかKIって形で、75年から95年にかけて最終的にたどりついたのは「地方の時代」なんですよ。「地方の時代」という視点から行政を見直す、つまり壁新聞だとか、ちょうど高校を100校分つくんなきゃいけないときで。建設費の1パーセントは県の単独予算で文化に回せた。

田口 言っていましたよね。

岡村 やってたね。それで自分たちの学校で得意とするものをなんか強調して建設する。それからKIで神奈川アイデンティティー、広報や印刷物、大きさだとか、デザインを統一するとか、そんなこと。その文化行政が進展して、美術館、博物館、音楽ホールというのがあっちの都市でもこっちの都市でも造るようになってきた。だけど経済効果、効率一辺倒への反省から心の豊かさへということに関心が動いてきた。その中で今まで行政の対象にならなかった、美だとか、芸術だとか、歴史だとか、それから歩行者空間とか、緑だとか、水辺空間だとか、ゆとり、遊びとか、そういうのが行政対象になりだしたわけだよね。だけど、なりだしたんだけど、なかなかその全体像というのはできなくて。ただ、NIRAという所が。総合研究開発機構という国の団体だけでも。1975年に京都のコンサルCDIに「文化行政システムに関する研究」という調査研究を委託に出した。

檜 はい、CDIですね。

岡村 CDIに頼んで。行政体質の見直し。これは行政の文化性の欠如。しかも文化に関わるには、自らの文化性を高めるために行政自身を文化化しなきゃいけないんだという報告書を出したんですよ。それから画一行政、依存行政からの脱却ということで、行政を質的に、行政の質を文化的な視点から点検してみるというようなこと。どういうことかっていうと、行政への市民的、人間的価値観の導入ということかな。それともう一つは個性の目覚め。

その中から自治体行政のソフト化、独自政策の展開という政策への市民参加とか協働とか、そういう視点が結構、いろんな隙間で呼び込めるようになった。だから、文化行政の意味というのは自治体の自主行政。所管官庁がないですから。国の指示を食らうってこともないわけね。自治体独自の政策形成ができたよ。

それから、文化性の再認識という中から都市景観だとか、町並み保存だとか、市民運動だとか、こういったものが盛んになってった。それと都市の風格、個性、市民生活の充実化。そういった文化行政は結局、まちづくりなんだというようなことを細川熊本県知事が言い出したりするわけね。そこから市民文化、生活文化の開花も始まるんだけど、行政主導じゃなくて活動のサポート。祭りとか音楽祭のときのサポートをするのが行政なんであって、主体は。

田口 市民。

岡村 市民なんだよ。その人たちがやるってことに対して行政は何ができるか。それを探るっていう形でのほうが。文化行政というのと行政の文化化っていうのの裏表の関係になっている。

さっきの話に戻りますけども。当時、田村さんの近くにいた人たちへのヒアリングでも、関係者の間に赤レンガの改修設計は浦辺が適任というムードが共有されていたようであると。それで田村さんとしては一応、ここまでだなと思ったんだろうな。

田口 浦辺さんが赤レンガ倉庫を美術館として改修する、設計者になるという、したいという話にはあんまり本には書かれてないですね。

岡村 本音のことっていうのはあんまり書かないんじゃないですか。

田口 田村さん本人もご自身の本にも書いてないし。でも、そういう話があったということですか。

岡村 そう。だから、私なんかずっとそう考えてたよ。そう聞かされてたから。

田口 きょう、聞くまで、そんな話があったんだと思って。岡村さんは開港資料館で。あとは県の方に。あれで終わりよ。

岡村 大佛やなんか来るのは、美術館にするときに異論が出ないために、浦辺に横浜で仕事をさせたよ。その前哨戦なんだよ。赤レンガ倉庫は市の所有ではないために具体化のめどが立たず、イギリス領事館の改修プロジェクトへと向かっていったよ。「田村の業績の中には

単体の建築物に関係したものは多くない。大高正人や槇文彦といった建築家と協働しながらも、あくまでも都市の視点での協働で関内周辺エリアで行われたものの多くは広場や通りのデザインだった」と。そして「少々、極端な表現にはなるけど、田村と最も近い関係にあった建築家は浦辺だったのではないかと。浦辺は横浜にしばしば訪れ、そのたびにホテルのバーで言葉を交わしたらしいと。他の建築家たちが田村とともに描かれるのが、会議やシンポジウムでの同席が多いこととは対照的に思えると。浦辺の中でも横浜の都市デザインに関することへの関心が高まっていたようだ。そして横浜開港資料館でのたまくすの木への扱いは横浜への歴史への配慮が表れているし、一種、独特な存在感を持つ大佛次郎記念館の外観も、ジャックの塔で知られる開港記念会館のエントランス周りの建築様相を再構成したもののようにも思えてくると。ポストモダニズムの時代でもあったと。浦辺は田村にとっては唯一無二の、そして都市デザインの横浜にとってはシンボリックな建築家だったのであるという書き方してる。

田口　なんで浦辺さんに赤レンガはならなかったのですか。

岡村　だって切れちゃったもん。田村さんがいなくなったからさ。

田口　ということで。

岡村　そうよ。

田口　ですね。

岡村　うん。だって美術館は、誰だっけ。

田口　美術館は丹下さんです。

岡村　そうだよな。全部、そういうのに走りだしちゃった。

田口　そっくりそのまま赤レンガを使って、あれを横浜の美術館にしたいと思ってたのですか。

岡村　そう。赤レンガを。

田口　赤レンガを横浜美術館にする。そうすると、丹下さんのああいう権威主義的な建物もなかったわけですね。

岡村 そう。ということなの。ただ、私は羽田さんじゃないからさ。ただ、こないだ皆さんに言われて、少しは答えることを考えなきゃいけないと思って曾我部さんの『都市デザインの横浜と浦辺の関わり』という本を開いてたら。それでこれ、彼に渡しときますから。そのときの入場券がこれで、中で売っていたカタログに今のが入ってます。

田口 そうすると、開港資料館そのものの本題に今度、行きますか。

岡村 行きましょう。だから、どうも話がうま過ぎるというふうに言ってたでしょう。要所
要所くぎ抜いてある、普通、だって誰を建築家にするかとか、何とかだとか悩むものでしょ
う、もっと。それがすすすすと進んじゃう。それで誰もいない間にその場で。これから行き
ましょうか。

田口 結局、浦辺さんのあの独特の作風というのがあるので。我々は浦辺建築に慣れてるわ
けですね、横浜の人はね。結果的に。

岡村 慣らされちゃったわけだな。

田口 慣らされた。それで浦辺建築、イコール、開港資料館みたいな強烈なイメージが残っ
たわけですよ。だから、結果としていい建築家をうまく使ったから、ああいう開港資料館と
かの、ああいうものができてきたのだろうなとは思いますが。だから、浦辺さんでない人
がやったならば、ちょっと違った展開になったのだろうとは思いますが。あの今風の開港資料
館でない、全然違う開港資料館になってたかもしれないと思います。とはいえ中身見ていき
ますか。

岡村 そうだね。ここで村松貞次郎って入ってるでしょう。この委員名簿の所を見てもら
うと。村松貞次郎さんって私が探したわけじゃないんだよね。探したわけじゃなくて、何とな
く建築家は普通、入れるよな、委員会の中に。じかに話させるじゃない。ところがお目付け
役みたいに入ってる、浦辺がどういう設計。普通は、あの当時までは古いものを前へ出して、
後ろに屏風を立て、旧館を囲い込んじゃったわけですよ。どんな手、使うかっていうのを解
説してくれるわけよ、村松さんが私の横にいて、いつも。あれはどうやって処理してくるか。
浦辺はどういう提案をするのかよく見ようとかね。楽しかったですよ。そういう人を選んだ
わけじゃないのに入れて。それは、だけど最初の中間報告のときから入ってるんだけどね。

田口 村松さんでしょう？

岡村 そう。

田口 だって村松さん……。

岡村 だから、そのまま延長で来たから、私は不思議に思わなかったわけ。

田口 だってもっと前から関わってたのですか。みなとみらいの開発の中で赤レンガやドック保存で。

岡村 そうなの？

田口 ドックの保存とかね。それ、1974年ぐらいですよ。そのときからもう田村さんは相談してんですね、村松さんに。

岡村 だから、自動的なんだな。

田口 そう。だから、歴史的な建造物の保存と保存戦略づくりは村松さん。堀さんだって村松研究室ですね。

岡村 そう。

田口 だから、村松さんに対しては、田村さんは絶大なる信頼を置いてたのではないですか。

岡村 だから1人、置いとけば。

田口 まさにお目付け役で。

岡村 お目付けっていうけど、そうなの。それで本当に浦辺がペリーズスクエアと「たまくすの木由来」を解説してね。また浦辺も商売人だからうまいんだよね、言い方がね。絶対、どこへ着地するかっていうのは触れないわけ。ただ簡単なこと、言うわけだな。イギリス領事館だから、領事館建設は規格があるんだよね、ドアのノブから全部。植民地、たくさん持ってたから。壁厚が35センチもあって、市街戦で大砲、撃たれても抜かれないとかさ。それから領事館だから部屋の出入口なども錯綜させてるわけだ、中を。こっちから飛び込んでいっても、こっちから出られる階段とかが、へんてこりに付いてる。ワイン庫なども当然、そういうのは細いわけだね。ところがそうでない広間とかなんかの所は、いかにも広々とさ。という感じだからあれは独特なのと、営繕がやるんだよね。そうすると、ドアのノブから

何から壊れたりすると本国に取り寄せなきゃいけないわけ。こっちで似たもの作るとか、そういうのもできないし。それともう一つは、土地は国有地で貸してるわけだから、要するに上物、買うわけでしょう、こっちは。上物の値段というのかな。上物、取っちゃえば土地の分はかなり払わなくて済むようになっちゃうわけだから。だから、上物をとにかく買いたい。何度も交渉して。最後になって、じゃあこれでっていうことにしたわけね。そしたら、ものすごい屈辱的だって向こうは言うわけだ。横浜市の契約書、あれは絶対、役所が損しない形の契約書の書き方になってるから。君と僕とが交渉してきたんだから、その積み上げで両方がサインすれば、それが私たちの契約書なんだよと向こうは言うんだよ。そういう契約書は、横浜市は通用しませんといっても分かってもらえないわけだよな。それだったらこっちの横浜市役所のほうをつぶしたほうが早いと思ってさ。全部出したの、手書きで、両方の。それでサインして。

ところが全部、計上されてるわけじゃないわけよ。ごみ箱だとか、そういうんだってあるじゃないですか。おっきい物は目につくやつが載ってるけども、例えば、どここのいすとか何とかって、こうしたらそういうのは。俺、びっくりしたのは、管財人が来て、なた入れるんだよ。なたでもう使えない形にして、要するに、ずるしなかったと。ピンはねしてないんだってのを証明するために。ところが、こっちは喉から手が出るくらい欲しいわけだ、いろんな。後、そんなことでどうしても作り替えなきゃいけないものがあったさ。元町の古い家具屋でって言ったら、椅子だけで1脚30~40万かかっちゃうしさ。机なんかはひでえ値段になって。それ、どんどん、われわれの前で燃やしてしまう。やり方が違うと思ったけど、やっぱりそれはそれで、しっかりした役人たちだよな。

ワインの貯蔵庫だとかそういうのもあるし。展示の動線など考えると、あれはやっぱり建築法上、技術的にも無理だね。だから、それも嫌という程、浦辺さんは、知ってたんだな。知ってたから、あそこを改修するよりは前に持ってきちゃって。だから、彼の発見は、ペリーズクスエアっていう、新設して「たまくすの木」を生かしたのがやっぱ発見だね。それであの奥に建物を入れて、前に講堂だとか展示室だとかそういうのを。それから貴重な資料の収蔵庫。炭酸ガスが出るような形のやつにしなきゃしょうがないわけね、桐の箱に入れてしけないように。それとあそこは浮き構造で造んなきゃいけないんだよ。50メートルぐらい、岩盤に当たらないんだよね。それでそれ、下まで入れるのは無理だから、浮き構造にしてるんだよね。そこでちょっと検討して、その浮きがもう少し深くないと荷ほどき室が足りないという理由で、余分に造っちゃった。うちのほうも足んないわけだよな、スペースが。だから、収蔵庫だとか。それで全然、使わないってのはおかしいから、半分は閲覧室にして天日を入れるようにしたけど。それで折り合いがついたんだけどね。

田口 昔の領事館の建物はあの位置ですか。

岡村 あの位置。全く動かしてない。

田口 動かしてない？

岡村 動かしてない。あれは動かしてない。だから、ここの施設が横浜市では昭和 56 年度の開設を目途に、としつこく書くわけね、何年度がオープンだっていうのをね。期限が切られているんだぞというのをね。かつて日米和親条約が締結されたゆかりの地にある領事館を利用して開港資料館を設立することとして、52 年度より学識経験者と市関係職員とで構成する開港資料館設立研究委員会議を開催して、横浜の実情に適した個性ある資料館の設立構想について協議してきたと。これ、だから中村紀一さんが参加したときだよ。以下の報告は設立研究委員が 53 年と 78 年 4 月に発表した開港資料館設立に関する中間報告を基にして。だから、田村さん、外れたのね、これでね。外れたから、この後ろの名前に田村さんの名前、入ってないけども。けども、53 年の 4 月ってことは 52 年の 3 月までに造ったもんだってことですよ。に発表した中間報告。それが、中間報告が中心になった。これで飛鳥田のはんこは戻ってんだよな。

これを基にして 53 年度の研究委員会議において、それをさらに具体化するために資料館における資料の収集、保存、管理および機能、運営方法について協議した結果を横浜開港資料館設立に関する基本的な方向としてまとめた。それでここに出すと。設立の必要性うんぬんから、それから資料収集の方法から。でもこれ、買わなきゃいけない本とか何とかってのは全部、もう網羅してるわけなんだよな。これだけはどんなことがあったってそろえるよ、と。

田口 それが 1978 年でしょう？

岡村 そうです。

田口 それで開設が 1981 年。

岡村 そう。

田口 わずか 3 年ぐらいですよ。

岡村 そう。

田口 実質作業 3 年ですか。

岡村 いい？ だから、どういうことかっていうと、この基本的な方向を出して、そのとき

に浦辺は初めて絵を見せたんだ。囲み込みの。これだな。この絵を見せて。そこでゴーにしちゃったんだ。だから、これはもうできてたんだと思うんだよ。

田口 81年にオープンしたのだから、建物の設計そのものはもう78年に確定したってことですか。

岡村 そういうこと。田村さんがいなくなっただから。78年。この委員でやったわけだから。どうしてかっていうと、これ、設計が確定したわけよ、この54年の中間報告っていうので。ここまで田村さん、入ってたわけだよ。絵は入ってないよ。絵は入ってない。どういうふうに入ってるかっつうとね。こんなの、あんた、設計図が手許になきゃ書けないよ。いい？

田口 はい。

岡村 横浜市が現在、構想を進めている開港資料館の建設地が中区日本大通3番地の旧英国領事館跡地であると。敷地面積が3070平方メートル。現在の建物、コンクリート建ての3階建ての延べ床が約1万平方メートルであると。現状のままで資料館業務を開始するのは建物の面積から見ても間取りや構造的な面から考えても困難であると。例えば、われわれの試算では少なくとも2000~3000平方メートル以上の延べ床面積が必要であると考えられると。収蔵庫の中には極めて貴重な資料が多く。収蔵資料の中にあるだ。火災、震災等の災害からこれらの資料を確実に守るためには、最新の設備で完璧な収蔵庫を新設する必要があると。さらに新たな一般公開方法を考えると、階段部分などは関係例規にも触れると思われるので、当然、改造しなければならず、また資料の性質に応じた空気調整等を考慮すると機械室の増強などが必要になると。それ、無理なんだよね、あの旧館の建物では。

田口 岡村さん、われわれの研究のスタンスから一番、今回の話で知りたいことの最たるものが。つまり、市長がまさに代わった中において、田村さんがどういうふうに通じたのか、動かなかったのか。それで岡村さんがそれをどういうふうに通じたことによって、市長が代わった中においても前に作った方針を。

岡村 通じたっていうことね。

田口 どうやって通じたのか。そして建物もそうだし、その開港資料館という運営の在り方が一番、重要だと思うのだけど、それは大変、お金と人がかかる話だから、新市長にしてみれば、ご自分が決めたものではないものにもかかわらず、膨大な、多分、予算がそれに投入されていくということに対して、あまり快くは思わないんじゃないかと思うんだけど。だか

ら、そういうような中で、どういうふうに岡村さんがうまくさばいたのかっていうのが、これは企画調整機能論としては面白いなと思うので、この開港資料館の話っていうのを聞きたいというのはこれ、そういう発想ですよ。

岡村 だから、こういう所はものすごい詳しく書くわけよ。組織および機構っていうとこだよな。普通、そこまで書いてあるとこってないんじゃない？

田口 ないですね。

岡村 それ、入れるわけ、わざとね。それで『資料館は市長部局に属するものとし』って書いてちゃうんだよ。それで職員は同館に必要な専門的職員および一般事務職員を置くべきであり、また組織機構としては少なくとも資料部門。資料の収集、展示、閲覧、保存、研究、普及等の業務、および管理部門。建物管理とか庶務等の業務の2部門は必要と思われる。なお上記のような業務を行うにあたってどうしても必要なことは、それに相応する施設、人員、予算等への措置であるけども、中でも特に大切なのは人の確保であり、市当局の思い切ったきめの細かな配慮が望まれるというふうに書いてあるしさ。とにかく、いじられちゃ困ることについては全部、歯止め掛けちゃって。

田口 そうですね。だから、つまり……。

岡村 買わなきゃならない物っていうのかな。これ、本当は普通、ばらで財政は査定するわけだよな。そういうことができないようにしちゃってるわけ。単年度に一遍だと、高くて買えないって言うだろうから、3年度に分けてそろえるから、それならいいだろうって。

田口 その3年度に分けるという3年度っていつから始まる3年度ですか。

岡村 だって開館前のときからだよ。だから、2年前に、3分の1そろってなきゃいけないんだな。要するに前の年に。前の年に3分の1そろってる。次の年と3年目には。つまり、開館時には全部そろってるって形。

田口 だから、なかなか役所らしからぬ、いろんな手だてを講じておられるなという感じがするんですね。それでそれは最初、言われたように、後戻りする論理というのはつくるのが大変だからということで、この開港資料館のプロジェクトというのは動いてしまったと。動かしたわけだけど。という理解ですかね。

岡村 そういうふうになるかな。例えば、目玉資料の紹介などで市民の関心を引き起こすこ

となんだよ、そういうときには。光の部分の情報を提供して関心を高めるっていうことは、例えば、この前のときにお配りしたじゃないですか。ポール・C.ブルームという人の資料。この人が。

田口 資料に載っている人ですね。

岡村 CIA の、戦後日本の最初の特派員。それは委員の中に 徳岡孝夫という毎日新聞の人が、たまたまコラムで資料が米国流出すると書いたわけよ。そうしたら、それを聞いた横浜市がストップかけたという。ストップかけたって、これは読んで、すぐその記者つかまえて、買い戻せるかとやるわけよ。すると、向こうもそのために書いたんだから、ブルームに会おうというのでさ。そこからやると資料が入れば、その途中でも毎日新聞は書くわな。サンデー毎日の編集長なんだからさ。それを書く。

それから、遠山茂樹、今井清一、両先生はじめ、横浜市大から来てる先生がたつてのはどちらかっていうと共産党系なんですよ。飛鳥田は社会党なんだよね。党派が嫌だとかん、そういう話じゃないんだけど。みんな、誰もがこの石井孝先生、この人が館長になると思ってたんだよね。その前の市史を編さんした委員長。学的にも有名なんだ。だけどそれは、私は抜きにした。要するに市大の先生方を抱え入れるわけだ。この後すぐ戦災誌というのを書かなきゃいけないわけ。当然、来るに決まってるんだよな、ここまで来れば。こないだ、東京でも早乙女さんか、彼が亡くなったけども。横浜にも今井清一やなんか横浜の会、持っててさ。それも本当は一緒に入れてくれっていう話だったんだけど、ここへね。要するに、ご存じじゃないと思う。それはそれでまた昭和史でと。それで外すというような。

その代わり、遠山さんに委員長をやってほしいんだと。委員長じゃなくて館長。そうすと意外なわけだ、横浜の市大のグループとしちゃ。それが遠山さんで。遠山さん、なかなか受けようとしなないわけね。家で娘さんにいじめられてるわけだ。「お父さん、官に使われるようなこと、痩せても枯れてもしないでね」って言われててさ。だけど遠山さんは、昭和史の扱いも含めて、もう一遍、子どもものときからの歴史教育というのをちゃんとしなきゃ駄目なんだという考えがあって、気持ち的には、そういう横浜のしっかりした資料館みたいなものができてくのに協力してもいいというような気になりかけてきたんで、今井さんと何度も、専修大学だったから水道橋か、あそこへ行ったり来たりして。お宅にも伺ったりして。

田口 すいません、その学者先生の位置付けと偉さと社会的な影響力は共有してないから分かんないので。だから、つまり岡村さんが今、言われたことをこういう仕組みというか、仕込んでおくと、この開港資料館の構想というのが新政権になっても手を触れさせずに動かせる力になったということですか。

岡村 そう。と、ポール・C.ブルームの資料が入っちゃったというのがさ。

田口 それは大きいですね。

岡村 これ、でかいですよ。

田口 さっきの先生がたはどうですか。

岡村 先生がたは、前向きで協力的でした。市長には、オープニングには5カ国の大使が全部そろいますよ。5カ国の大使が来るったら、細郷さんなんてにっこにこだよ。

田口 それはうれしいよね。

岡村 もちろんそれも県庁の真前でやるんだよ。それで県知事より自分が横浜市長だからやれるわけだよ。そのときそれを中継ぎしなきゃいけない人がいたわけだよな。助役で、総務担当。元消防局長だったのかな、市長選で選挙事務長を務めて、そこへ来ちゃった。一期終わったら、どうせどっか行かなきゃいけないんだろう。開港資料館なんてどうだろうか、自分のものつくるんだと思って市長を落として下さいとかさ。これはやりましょうという方向にね。そういうのもあれば。手練手管、たくさん使いますよ。だけど、それはゲームだからね。

檜 榎 私も田口さんと同じような認識をもっています。政治の不連続性ってあるじゃないですか。飛鳥田さんから細郷さんに市長が変わるといのは政治の不連続性を表している。だからといって、行政は同じように不連続にはならないのであって、連続性を志向するのではないか。ここでの開港資料館というのは、まさに行政としてはそれまでの動きを連続させていこうとするものであったとみることはできないか。企画調整もここでは「行政」であって、飛鳥田時代の方針を維持しようとしたとみることはできないか。だから、方針決裁が生まれたということではないでしょうか。

岡村 プランによってはね。

檜 榎 方針決裁が。それはもちろん岡村さん個人の能力の問題がすごい大きいとは思いますが、ただ。

岡村 いや、それは別にですね。

檜 榎 細郷政権になって政治体制はかわったが、まだ当時の横浜市政はそこまで連続する

だけのパワーがあった。

岡村　そうです。

檜　そう見るか、それとも他の行政と同じようにふにゃふにゃしてて。要するに自治省の元事務次官が市長になったりするもんだから、みんながふわっと手を引くような所は否定できないにしても。その辺の行政の継続性という認識がすごく大事だと感じました。きょうの話、聞いてて、政治の不連続と行政の連続といった、あるいは企画調整機能の連続っていう。その辺の中で具体的に言うと、開港資料館という形で言われたのは、今、方針決裁をすぐ取りに行く、そのすばしっこさ。それから、「調査季報」にちゃんと書いてて、外部化して。しかもマスコミとのつながり、やっていく。そういったことをやるという、いわば当時の自治体行政にあんまりなかったんだけど、そういったものは持つだけの10年間があった。それで、そういったものを政治の不連続の中に全部、捨ててしまうという横浜がいたのかもしれないというのが、今、われわれにとってみればね。特に今の、同じような質問になっちゃうんですけど、いわばこの開港資料館の成立は一体、何なのかというね。その仮説をちゃんと設けて、そのことをもって、これからの自治体にもそういったことを続けてもらえるようなね。なったらいいなって。すいません、ちょっと質問、同じなのかどうか。

田口　全く同じです。

岡村　さっき私が「この話は後にしましょう」といつったのはね。長洲知事というのも県にいるわけね。知事の晩年、私は県に行ったわけですよ。何をやってほしいかったら、あそこの紅葉ヶ丘なんだ。紅葉ヶ丘の音楽堂ですよ。県立音楽堂をはじめ要するに前川村と言われる所の再編成をやりたい。それは21世紀の文化構想というかな。文化施設再編計画っていうことで。その前に各市が100周年とかそういうのをやる中で、イベントをたくさんやってたじゃない。横浜も博覧会やったし。それから県も『サーフ』というのをやったんですよ。相模湾の自然海岸を残すってやつ。横浜は財団法人で。私はずっとプランまでやって、見事、そのときの局長さんからは出されましたよ。これは面白かった。全部、基本計画まで作って。電通に刺されたって言ったほうが早いかもしれないな。そういうようなことがあります。でも、それはそれで。

県のほうは結構、真面目で。直接、市民と触れて仕事をしてないわけですよ。国と市町の間に入って業務やってるわけだから。13市町あるんです。その相模湾は横須賀から始まって、熱海の手前の湯河原まで。そこが当分、埋め立てられない仕組みをつくる。つまり、そうすと自然海岸が残されて、そこしかないっていうことになるよね。だから、それを民間、市民、それから行政の三者でそれぞれ分担して進めていきたいと思います。それをイベントで行きたいというのが『サーフ90』。県ではそういうイベントみたいなことをやった経験

がないんで、来てくれっていうんで。来てくれっていうか、こっちも横浜に飽いたから、そちらにしばらく行くかといって。それが終わって、一番、県が担当してほしいのは文化室でやっているこの伊勢山の施設群。古いでしょう、みんな。音楽堂も古いね、50年近い。それから演劇する所もあることはある。図書館もあるけど。もう今、みんな、図書館も何も、劇場も市が持ちちゃってるじゃないですか。それと、あと、青少年うんぬんというのにも要らないわけですよね。青少年会館なんてのがあったり、科学館なんていうのがあるけど、ヘリコプターが置いてあるというような時代遅れな施設。あと、音楽堂と図書館と。ホールっていえば横浜にも、横須賀にもあれば、相模原にもあるって。

その再編をするっていうのは、そういった図書館業務うんぬんというのは市に下ろす。それから青少年の施設等も全部、市に下ろす。さらに、いわゆる一般に使われるホールだとかそういったものは市に任せて、その音楽やなんかを演じたり創ったりする人を養成するっていうものならあってもいい。つまり、演じる人間たちを増やすような養成所を県がやるっていうんだったら意味がある。そういった機能を整えるためにあそこへ行ったよ。一遍にやるわけにいかないから、紅葉ヶ丘を変えていきたいんだと。それをやってくれというので計画をつくりました。長洲さんは5期までと決めてるからね。さっきで言えばタイムリミットを切られてるわけね。こういうことでして。

次に来るのは国から誰か来るでしょう。次官級が来る。そうすると、その前に政策をセレクトしとかなきゃいけないわけです。今まで知事が5期かけてやった事業で終了したもの、もうやらなくてもいいもの、これから先へ延ばすものと。それを勉強する。

彼、先生でしょう。それでやっぱり長い間には優等生が周りに集まっちゃうわけ。蛮勇を奮って突っ走るとか、そういう人は少なくなってっちゃうのよね。だから、ぱっと説明して、ずっと分かって、こざいかにまとめて、それをそつなくやっていくもんだから、だんだん。そりゃそうですよね。5期やったってことは20年。オギャーと生まれた子が有権者になるんだから。他の誰よりも知ってるわけですよね。だって最上の情報をあんな頭のいい先生が毎日、聞いてるわけだから、かなうわけないよな。だから、「君、そう言うけど、こういうこと知ってるか」なんてやると、もうパーなわけ。そのパーなときに演じられるやつね。やろうっていうんじゃないで、うまくまとめて先、進めちゃうっていう。だから、これこそ、はんこ押しとかなきゃ危なくてしょうがない。だけど「こうしといたほうがいいんじゃないですか」って私が言ったら、「いや、君、もうここまで来れば大丈夫だよ」って言うから、「そうですか」と。そして新知事が来て、また呼ばれるわな。「これ、どうなっていますか」と。明快に言ったよね。「私は、1期目はものをつくりません」と。「つくりたくないっていうこと言われてきました」って。そして、「その代わり要求される額だけのソフトのお金をお払いしますから、そちらで團先生やなんかのメンツをつぶさないように。それから、「関係をそのまま維持できるように」と。「そういうふうにしてください」と。だから、違うと思うな、それぞれ。うまい説明になってないかな。

青木 ちょっとよろしいですか。

岡村 はい。

青木 これまでお話、伺ってて、行政の文化化っていったときに、その以前は非文化的だったのかっていうの気になるところなんです。つまり「行政の文化化」というときに、それは今まで「非文化的」だったものを何かしら「文化的」にするから「行政の文化化」というものが成立すると思うんです。そうなったときに、だから最初に思ったのは、それで政治家が文化を持ち込むのか、それとも自治体が何かしらの文化を実現しようとしたのか、これ、どっちなのかなってというのが個人的に気になってまして。横浜の場合だと、例えば、開港資料館なんかは自治体。政治家じゃなくて。そっちがやっぱり文化を推し進めようとしたのに対して、今の長洲さんの話なんかは政治の側。そっちが文化をもたらした。なんかそこに違いがあったのかどうかを岡村さんに伺ってみたいと思うんですが、その辺りはどうでしょうか。

岡村 やっぱり県と横浜市は、風土は違うと思いますよね。県の構成員というのは大体、地元のいい所の次男坊、三男坊なんです。厚木高校と小田高の二つに大体、分かれて、そこから一人ずつ、副知事が出て、あと、国から来てね。だから、どちらかといえば県のほうが真面目に役所をやってるから。だから、真面目になってるわけ。ところが、横浜はそんなことないわけだね。要するに県は地元で、長男は何やってるかという地元に残って跡を継ぐわけですね。この県の次男坊、三男坊は何やるかっていうと、そこでイベントがあるわけじゃない。相模原緑化フェアとか。『サーフ '90』きょうも手伝いに行かなきゃいけない。そういうときだけ地元に戻されるわけ。帰されて、その人が地元市町村をまとめ、少し施設くらいをやって戻ってくるという、そんな。だから、けど随分、県の人っていうのはお行儀がいいんだなっていうイメージ。

青木 でもそれ、すごく重要というか、面白い点で。やっぱり、だから属人的なんだと思うんです。文化の在り方が。長洲さんがやった、音楽家の養成を県が行うために音楽ホール造るっていう、それはかなり画期的だと思うんです。ただ、もしそれ、長洲さんじゃなかったら、そういう形に文化行政が県のレベルでは展開しなかったんじゃないかなとも思うんです。一方で横浜の場合は飛鳥田さんという革新の人からがらっと細郷さんみたいな違うタイプの人になっても開港資料館が実現されていくというのは、やっぱりそれは知事の力とかじゃなくて、自治体の側に何かしらのパワーがあったっていう理解でいいのでしょうか。

岡村 市民だろうね。細郷だって受かるときはそんなにいい形で受かってないからね。その

ときの選挙は。確かに勝ったよ。それは勝たなきゃおかしい、あれだけの多数の政党から支援を受けたのだから勝ったけども、お付きのほうだ。だからみんな、楽しんじゃったよね。楽しんだから、またこれからも続けようなんて思わなきゃ。どう言ったらいいのかな。やっぱり市民、行政、そして政治の中で、市民から上がってくるのが一番。飛鳥田はよく言っていましたよ。「中から役所が変わるなんてことはあり得ない」と。「俺は信じない」と。「だから、俺は外から声をかけるんだ」と。「外からやって、そしてそれを市民が踏み越えていってくれるんであって、役所の中の人間はそれをやりやすく、邪魔しないでっていうところまで行けばいいほうなんじゃないの」なんて言っていましたけどね。

青木 しばしば、政治家は市民に弱く、市民は自治体、行政に弱く、行政は政治家に弱いという、その三者のバランス感覚がどう機能するかが重要だなんていうふうに言われたりするじゃないですか。だから、横浜市の場合はそれが 70 年代から 80 年ぐらいに割と機能してたんですね。

岡村 そうなんですよ。それがまた行政も市民も政治家も言わざるを得ないようなひどい生活環境だったっていうのはあるんじゃないかな。

青木 その中で、でもなぜ歴史を文化と捉えたのかっていうのは結構、気になるんですよ。開港資料館の話なんですけれど。文化ってもっと他にもいろいろあり得るわけじゃないですか。音楽だったり絵画だったり。その中で歴史ですよ。これ、なんで歴史なんだろうなっていうふうに。しかも、幕末から関東大震災までを対象としてるんですけれど、あれって何か訳があったんですかね。それをもって横浜らしさ？

岡村 どういうふうに言えばいいかな。

青木 ご存じの範囲で伺えたらと思うんですけど。

岡村 田村さんとよく話が一致したのは、私たちはなぜ横浜に来たと。歴史がないからです。だって京都へ行ったら 1200 年、鎌倉なら 800 年、それからお江戸 400 年。たかだか横浜、150 年じゃない。あとは砂浜だったわけだから。だから、そういう点ではつかみやすいというの。それと、1200 年にもなったらいろんな意見があっちゃってまとまらないじゃないですか。それがある程度、一定の方向で合意できる場所というものはあるよね。歴史はやっぱり文化なんじゃないの。一番の。

青木 でもそれ、すごく重要というか、面白い点で。やっぱり、だから属人的なんだと思うんですよ、文化の在り方が。長洲さんがやった、音楽家の養成を県が行うために音楽ホール

造るっていう、それはかなり画期的だと思うんですよね。ただ、もしそれ、長洲さんじゃなかったら、そういう形に文化行政が県のレベルでは展開しなかったんじゃないかなとも思うんですよね。一方で横浜の場合は飛鳥田さんという革新の人からがらっと細郷さんみたいな違うタイプの人になっても開港資料館が実現されていくというのは、やっぱりそれは知事の力とかじゃなくて、自治体の側に何かしらのパワーがあったっていう理解でいいんでしょうか。

檜 ですから開港資料館というのは本当に歴史がテーマなのか。要するに開港期という、いわば明治以降のある種のビッグイベントだし横浜開港は市民にとってアイデンティリーの根源ですよね。

岡村 ばらばらだったからね。

檜 黙っておくと大きな東京の一部として位置づけられてしまう。

岡村 だからハマっ子を言うときにね。

檜 ハマっ子にとって、俺たち、何者かっていうことを問わせる道具だとして、開港資料館をつくるということでしょうか。

岡村 だって私、鎌倉にもいましたけど、800年たつてると大変ですよ。派が分かれちゃうんだから。中世をどういうふうに位置付けるのかっていうのによっても違うしね。

青木 だから、訴える力が強いんじゃないですかね。横浜で歴史っていう……。

岡村 ないから。

青木 だからこそ逆に、その市民に対して訴える力があったから、政治家が代わってもずっと……。

青木 やめずに強い力を持てたんじゃないかなっていう、そういう思いが。だからやっぱりその80年代の文化ホールの設置だとかいう文化行政と、70年から構想されてた開港資料館というのの構想は同一の水準で論じられないような気がして。やっぱり市民をどう捉えるかというところに結びつくかもしれません。

岡村 だから、県からよく相談に来るわけですよ、「何とか文化室つくってくださいよ」って。「誰と誰とかがいるじゃない」って言うからさ。だって俺、今、自分の所で資料館やっ

てるしね。横浜はまちづくりでそれをやってこうって考えたから。かといって壁新聞というのはね。文化大革命やろうってのと同じことになっちゃうんだから、議会の中でぼこぼこになってやってんじゃしようがない。結局つぶれちゃいますよね、それはね。でも県は、それをする中で地方の時代っていうのを20年かけて、まとめてきたんじゃないですか。

青木 文化振興を担うのは誰なのかなという問題もありますよね。

岡村 それもありますよね。

青木 誰が担ってるんだらうなって。今だとちょうど2020年の文化の在り方ってどうなのかっていうと、私がこないだ、ちょっと横浜市に聞いたところによれば、やっぱり基本的には自治体の外部なんです。市役所外の人間が勝手にやってください。支援はある程度するけど、でも、向こうの動きを待っていますっていうんですけど。横浜の70年代はどうだったのでしょうか。岡村さん自身の経験としてはどうだったのか気になるんです。文化を仕掛けていくという位置付けがどう与えられるのかなと。

岡村 文化を仕掛けるとか、必要なイベントだったらどんなことがあってもやっちゃうだろうし。文化行政なんか当時なかったもんね、言葉が。

青木 そうなんですよね。ないから、つくるしかない。

岡村 文化というのは大体、教育委員会のほうだったですからね。だから、文化会館なんて教育文化会館なんて、教育とくっつけてやってるわけだから。

青木 すごく中身が分からないから、いろいろなことに結び付けられた。ある意味、自由であったと思うんですけど、それって何となく、それ以前の科学的な行政とちょっと話は似てる気がするんですよ。あれも科学的な行政っていうものがぼんやりしてるから、割合、自由にいろんなことがそこで話し合われたり提案ができたり。それが文化という形に変わっていったんじゃないかなっていう思いがあって。

檜 当時、行政の文化化、文化の行政化っていうキャッチコピーが流れていて、文化人はもっと行政と仲良くしなさいと、行政はもっと文化を恐れないで立ち入ることが大事だと語られていた。

岡村 でも、私の場合には開港資料館はたまたま開港資料館だけだったんであって、その後、それを継続してどうのという動きはなかったからね。だけど、そういうんでずっと、先ほど

言った県の森啓さんやなんかと向かったのは、島根大学へ行ったのかな。何つつたつけ、こないだ愛知かなんかの、展示会の補助金扱いに1人、反対した。

青木 野田邦弘さん。

岡村 野田君、彼はずっと一筋でしょう、その文化？ 教育委員会の文化をずうっとやって。

青木 野田さんはその後、創造都市なんかに関わってらっしゃる。

岡村 だってそれは文化がまちづくりの中で必要になってきたから。だから、彼のが、その継続っていう点ではいいんじゃないかな。

田口 今回のテープ起こしをしながら、ちょっと加筆していただいてっていう感じかな。

浅川 最後、ちょっと1点。私、この文化行政とかの辺り、知識、一番、私の中で持ってないんですけども。先ほど青木さんの質問の中で、行政の文化化というところでなんで歴史に着目したのかという話があったんですけども。横浜ってそもそも高度成長期に都市のアイデンティティってすごく叫ばれてたじゃないですか。そこから考えると私は文化があって歴史ではなくて、先に歴史があったのかなと思うんですけどね。その歴史をどうやって。歴史ってそのまま歴史という言葉にしちゃうと過去のものって、ちょっと理解されないの、歴史を言い換えるために文化を持ち出してきたんじゃないかなって気もするんですよ。

だけど、文化ってあっても、それはそもそも歴史を横浜で(***サカセテ@01:59:08)、横浜、隔離したかったわけじゃないですか。だからベッドタウンにはしたくなかった。それ、かなり高度成長期の初期からの問題意識として強くあって、都市の課題だったわけですよ、ずうっとそういうとこ。現在、引きずってますけれども。それでみなとみらいにそういう業務施設を造って、そこで働けるような場所をどんどん作りたく。だけど、なかなかその業務施設が集まらなくてっていう問題をずっと抱えてたわけです。そうなってくると、歴史っていうのは文化を持ち出す前にあったんじゃないかなというふうに思っていて。だから、歴史のそういう資料の集積をする場所をつくるというのもかなり必然だったのかなっていうふうに思ったんですけど、その辺り、どうでしょう？

檜 開港資料館そのものの現在の機能をよく知らないんですけど、そういう役目っていうんですかね、どういう機能を担っているのか。

田口 調査研究機能ですよ。

青木 あと、アーカイブですかね。さっき言った幕末から関東大震災までの歴史資料を主に収蔵するという。

浅川 ただ横浜は人口が出ていきやすい。昼間の人口が出ていきやすい所なので、そういうアイデンティティーが必要っていうところがあったと思うんです。逆に、人が集まってくる東京はそういうアイデンティティーとか、あんまり必要じゃないのかっていうと。やっぱり横浜だからアイデンティティーが欲しかったのかな。横浜でなくても周辺の自治体、どこでもいいと思うんですけれども。埼玉とか。川崎なんかどうなのかなと思うんですけど。やっぱりそういう所だからすごい歴史に執着するような、そういう感覚というのが強かったのかなって。

岡村 当時、横浜都民と言われたんですよ、みんなね。言われるくらい。

浅川 出てっちゃった。

岡村 横浜というのと、よそから入ってきた人が多かった。

浅川 つながりやを・・・。

岡村 それに対して、少し。だから、開港資料館だって開港じゃなくて開国なんだよね、本当はね。開国開港資料館なんですよ。開国はあそこなわけ。開港はだって横浜だけでなく、神戸もやりや、函館もやれば新潟もやったわけだから。だから、開国だけが誇れるところ。それに気が付いてるのが横須賀だよな。「俺のところがもう一年、先だった」ということを盛んに言ってる。でも、鎌倉に私いて、横須賀に仕事に行くときなんか久里浜でペリーが日本に来たときに喋った当時の感想を石碑なんか置いてあるけども。やっぱり開国なんだろうな、誇れるとすればね。だから、それでコアっていうか、まとまりってのがつくればと思うけど、なかなかそこまで踏ん張って住んでる人って少ないんだけど。最近は多くなったかな。田口さん、もう何年、ここへ住んで？

田口 44年です。

岡村 44年でしょう。横浜市民っていう感じ、もう？

田口 はい。

岡村 じゃあもう出来上がったんだよ。

田口 だから、あれじゃないですかね、横浜のアイデンティティーをつくりたかったんじゃないですか。田村さんは歴史調査をやっていたじゃないですか、アーバンで。その港町の都市形成史をまずは始めてみたら、横浜全域のアイデンティティーをやはり考えなきゃあかんというふうにとんどもん発展していくんだと思うんです。だから、その中でやはり港の部分といったら、まずはそこをしっかりと資料として押さえて、ちゃんと研究もしてっていう機能を持たなきゃ駄目だと考えた。

岡村 だから、横浜学の起点。横浜が生まれたのはそもそも開国で生まれたんだから、そこをやはりきちっとみんなが触れられる形にしようっていうことじゃないかな。

田口 ただいかんせん、青木さんが言っていたように。横浜市内の大学の先生方はあまり横浜研究をやらないで、東京研究をやったりしている。横浜国大の先生が横浜のことを勉強したいと思ってないのかもしれない。だから、市大は少しだけでもやって欲しい。

岡村 市大、そうね。でも、一時なんじゃないかな。今はどうなんだかは分かんないけど。

田口 元気にやっている人たちがいるのかいないのか、よく分かんない。でも、開港資料館をやっているときは、岡村さんは一緒に誰とやっていたのですか。

岡村 今井清一さんはじめ服部一馬さんとか、加藤祐三さんなんか。皆さんお元気だった。

(了)